

三浦朱門

にわか長官の510日

朝日新聞社

# 三浦朱門

## にわか長官の510日



にわか長官の510日

定価 九六〇円

昭和六十一年十一月二十日 第一刷発行

著者 三浦 朱門

発行者 八尋 舜右

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五―三―二  
編集・図書編集室 販売・出版販売部  
電話 〇三―五四五―〇一三一（代表）  
振替 東京〇―一七三〇

にわか長官の510日・目次

## 第一章 にわか役人

それは一本の電話から始まった

7

蝙蝠の鳥まじり

20

## 第二章 文化庁長官の仕事

長官は偉いのか？

42

なぜ、私が長官になったか

51

## 第三章 個室の中で

長官の仕事の内容

68

ストックホルムの燕尾服

80

## 第四章 世の中 順風満帆とはいかないこと

いわゆる「強姦事件」 94

第二国立劇場 107

## 第五章 長官らしい役をつとめること

韓国文化部とのこと 135

予算編成 157

## 第六章 六十一年春、そして退職

皇居と宮内庁 186

飾り物としての文化庁長官 196

いよいよ、私の番がきた 205

あとがき 215

装幀・多田  
進

にわか長官の  
510 日



## 第一章 にわか役人

それは一本の電話から始まった

昭和六十年一月下旬のある日の午後、

「文部省の佐野ですが……」

という電話がかかってきた。文部省の佐野というと、私には一人しか心当たりがない。昭和四十四年の大学紛争当時、臨時大学問題審議会、略して臨大審という委員会があつて、私はその一人になった。佐野さんは当時その担当課長だった。背の高い、歩く姿が風になびく<sup>あし</sup>芦のように何となく心もとないところが、切れ者だという評判に似ず、どこかユーモラスな人だった。早稲田の美術史を出ていた姉が昭和二十年代に、文化庁の前身の一機関である文化財保護委員会に勤めていた時期があつて、そのころだろうか、それとも私の旧制高校時代の先生で、この委員会の課

長を務めておられた方を訪ねた折だろうか、木造の委員会の建物の薄暗い廊下で、ポケットに手をつっこんで歩く長身の後ろ姿を、あれが佐野さんだ、と教えられた。

臨大審の委員になる時、私は文部省をてこずらせた。

当時、文相は坂田道太さんだった。私は二十一年勤めた日大をやめた直後で、紛争に対して当事者意識が残っていた。あのころ、多くの大学が授業もできない状態にあつて、それを沈静させるためにできたのが臨大審だと聞いた。それで最初、委員になれ、と言われた時、教師時代にやりかけたことをこういう形で完了させることができれば、と簡単に引き受けたのだが、知り合いの編集者に、何も政府の楯になつて、世論の矢面に立つことはないかと忠告された。私も気が弱いから、坂田さんに断りの電話をかけた。すると坂田さんは委員会のメンバーは佐藤総理に提出してあるのだから、今さら断られても困る、説得のためにこれから拙宅に来られると言われる。

大臣に来られたりすれば、引き受けざるをえなくなるから、私はあわてて、自分の勝手からなのだから、こちらからうかがう、と言って、九段あたりにあつた議員宿舎に大臣を訪ねた。私は自民党の大臣にもなろうという人なら相当の宿舎に入っているのだと思つたが、坂田さんの宿舎というのは、当時でも珍しくみすばらしい二DK程度のアパートで、言ってみれば、三十代の單身赴任のサラリーマンの宿舎、といった感じであつた。大臣がすすめてくれた座布団は文字通りのセンベイ布団だったが、有り合わせのコップに注いでくれたウイスキーはジョニー・ウォーカ

ーだった。普通のアパートと違うことといえば、学校などの何十周年記念かの配り物らしい時計が、ぎつと二、三十、部屋のあちこちにあったこと程度であつたろうか。

私はすっかり調子が狂って、断る気力がなくなてしまった。大臣は朝の九時には水戸に出張しなければならぬということだったが、私の説得のために、夜の十一時ころから明け方の四時までつきあってくれたのである。

結局、私は委員を引き受けたのだが、メンバーが発表になった日には、すべてのテレビ局と全国紙、主要通信社の取材を受けた。忠告してくれた編集者の心配は見当違いではなかったのである。

当時の制度でいうと大学局の局長は今、東京国立博物館長をしている村山さんで、担当課長が佐野さんだったから、坂田さんと、この二人に対しては、臨大審の時は土壇場ですねたりして迷惑をかけた、という一種の罪悪感がある。臨大審はいつの間にか開店休業ということになり、それが坂田さんの狙いでもあったのだろうが、臨大審の伝家の宝刀はついに抜かずにスクラップになってしまった。果たして切れ味のよいものであったかどうか、今となっては分からないが、刀など使われることなく、スクラップになるのなら、それが一番いいことなのである。

臨大審の開店休業と一緒に村山さん、佐野さんとの縁も切れたが、その後の新聞報道で村山さんが文部次官になって現役を退き、佐野さんが文化庁長官から、文部次官になったこと程度は承知していた。

その佐野さんからの電話である。

「文化庁の長官をやってもraithたいんですがね……」

私は笑ったと思う。

「ゴジョウダンでしょう。とても、そんな器ではありませんよ。第一、私のような素人が長官になって何がやれるというのです」

電話はそういうことで、冗談か本当かも分からないままに終わってしまった。妻にその電話のことを話すと、彼女は、

「そういうことを冗談にしてしまうのは失礼じゃないかしら。お断りするなら、やはりまじめにお断りすべきだと思うわ」

彼女は前に某国駐在の大使にならないかと言われたことがあり、元内務官僚の実業家から、参議院に出ないか、とすすめられたことがある。どの場合でも、彼女はおよそガラではないから、と断ってきたが、私もそれには同感であった。たとえば、彼女に提示された赴任国は日本とあまり関係のない小国だったが、そういう所に彼女が赴任したところで、何ができるというのだろうか。せめてカトリックの本山であるバチカン市国の大使なら、枢機卿の知人もあり、世界に情報の網を張り巡らしているこの国に、彼女なりの働きかけはできるかもしれないが、縁もゆかりもない国の大使になったところで、プロならともかく素人では何もできないことは火を見るよりも明らかで、結局は日本政府の国内向けの打ち上げ花火になる恐れがあった。

私は臨大審の時のようにマスコミにもみくちやにされるのは嫌だったし、妻の場合のように、花火になるのも嫌だった。焚くほどは風の持てくる落葉かな、という句があるが、書齋で原稿を書いていれば、それなりに忙しく、妻にもしものことがあっても、何とか老いた両親を養ってゆくことくらいはできる。今さら何も世間の波風にさらされる必要があろうか、というのが、率直な印象だった。

翌日だろうか、木田宏さんから電話があった。木田さんは前に文部次官をした方で、阿川弘之の旧制広島高校での後輩にあたる。阿川が何かという偉そうに、木田が、木田がと、私たちに紹介してくれ、時折は一緒に酒を飲む間柄である。

「佐野君からの話ね、そう簡単に断らないで、真剣に考えてほしい」

「じゃ、親しい友人に、たとえば阿川弘之とか遠藤周作とかに相談してもいいですか」

「こういうことは、公開されると困るんですが、まあ、その範囲ならいいでしょう」  
ということであった。阿川に電話すると、

「まあね、役人の世界なんて、意地悪い御殿女中みたいなもんだろうけど、文化庁なんだからね、文化人が長官になっていけないことはない。いや、そうあるべきなんだ。それで木田なんかやれ、というのならやったらいいじゃないか」

阿川は平生は木田さんには威張っているくせに、彼がやれというなら、やったらいい、ということであった。私は密かに心配していたことを阿川に訴えた。私は前にユネスコ委員をしたこと

があつたが、近年、ユネスコの評判は自由圏の先進国の間で芳しくない。たとえばそこを脱退する、といったことの仕事の一部を担当するとか、韓国でオリンピックをやることになる、どうせ反対運動などが起きるだろうが、それと文化庁とかかわりがあると面倒だな、という気がしていた。するとほとんど折り返し、阿川から電話があつて、

「木田に聞いたたら、ユネスコもオリンピックもまったく関係ないそうだよ。やれよ、お前」  
一方、遠藤の方は、

「お前、おれの息子の仲人をするだろう。仲人は三文文士より、文化庁長官の方がカッコいいもん。やれ、これは代父としての命令だ、やれ」

代父というのはカトリックの洗礼を受ける際の、保証人のようなもので、英語でいうとゴッドファーザーである。私は洗礼を受ける際に代父として、もっとまともな人を頼もうかと思つていたのだが、遠藤が情けない顔をして、

「おれを代父にしてくれよ。おれ、一度は代父をやりたいかったんだ。な、頼む」

というからやつてもらつたのだが、洗礼がすむと、とたんに態度が大きくなって、

「盆暮れには代父のところに付け届けをするもんだぞ」

と言いだしたのである。だいたい、キリスト教に盆だの暮れだのという考えはない。クリスマスと復活があるばかりなのである。しかしとにかく、彼は私に強く要求する時は、代父の権威を利用するのである。

妻にも相談した。

「佐野さんなり、木田さんが、あなたにやれとおっしゃるなら、あなたがやれることがあるとお考えだからじゃないの。あなたが今のあなたのままでやれることがあるなら、やってもいいんじゃないかしら。もし、長官をやるために、自分を曲げる必要があるのなら、引き受けてはいけないんでしょけれど」

正直に言って、私は文化庁がどんな状態にあるか考えたこともなかった。第二国立劇場については、週刊新潮か何かで、音楽家や建築家の一部が反対している記事を読んだことがある。記事の全体のトーンはみみっちい劇場を造るのは恥さらしであるばかりか、国費のムダ遣いだ、といったことであつた。また秋の芸術祭も戦後四十年たつて、そろそろ曲がり角にきている、といった記事を読んだ覚えがあつた。かつて「私は貝になりたい」という流行語にもなったテレビドラマが芸術祭賞をとつた記憶があるが、近年ではテレビ局では芸術祭を無視するわけにもいかず、春先からそのためにプロジェクト・チームを組んで、作品を用意しているが、担当の人にとっては大変な重圧だ、といったことも耳にしたようだ。私の関係する文学はほとんど文化庁とは関係がない。世界の日本研究者を呼んでシンポジウムをペンクラブで開いた時に、私は雑用係をやつて、文化庁から五千万円もらつたことがあつた。お陰で会計検査はあるし、開会式には皇太子殿下においでいただいたことから、同業者の間で反発する人も少なくなく、それやこれやで、文化庁とのかかわりにはあまりいい記憶はなかつた。

ただ言えることはペンクラブに五千万円もらったことを含めて、文化庁は芸術家、文化人という、国民のごく一部の人を相手にして、一般国民の生活から遊離しているのではないか、という印象があった。文化庁が役所なら、もっと国民一人一人に存在を感じられるようになるべきだ、という気持ちはあった。もっとも、ずっと後になって役所に入って知ったのだが、文化庁の予算は三百四十余億。これを一億二千万の国民の人数で割ると、一人当たり、三百円に満たない。三百円でいいたい、どれだけの文化の香りを一人一人に届けることができるのであろうか。

一方、私は遠藤がやっている「樹座」という劇団を知っていた。これはアマチュア劇団で、出演者は出演料をもらうのではなく、納めさせられるのだが、希望者が殺到するのである。それともゆるい演劇青年ではなく、家庭の主婦、サラリーマン、大学教授、編集者など。中には七十の老女もいて、若い娘と並んで、レオタード姿でラインダンスをやりたがるのである。それから各種のカルチャーセンターのようなところで、単に講義を聞くだけでなく、陶芸をやるとか、刺繡ししゅうを習う、といった人が多いことも聞いていた。

日本の芸術は、私の関係する文学の世界でも、閉塞へいそく状況にあるという評論家の文章を目にするが、伝統芸能も、新劇・オペラ・バレエにしても、しっかりした基盤を確立しえないでいるということを聞く。しかしそういう芸術家の嘆きとは別に、そのような分野を趣味としてやるアマチュアの数を決して少なくない。俳句、川柳は数千万人の趣味だという。その他にも囲碁・将棋・マージャン・料理・服飾デザイン・音楽などを自分でやって楽しむ人はいくらでもいるし、音